島根の記憶 ⑪

松江大橋 その1

「18代目」夢から覚め

〝水の都〟松江市には、六百七十本余りの橋（長さ二㍍以上）がある。中でも橋南、橋北両地区を結ぶ松江大橋の歴史は古い。初代は江戸時代初期にさかのぼり、現在の橋（長さ百三十一㍍、幅十二㍍）は一九三七年（昭和十二年）に完成した十七代目。既に半世紀以上経ているが、二十三年前、〈幻〉に終わった十八代目の構想があった。

松江市街地二万戸以上が浸水した七二年の「47水害」を教訓に、旧建設省と県は七九年、斐伊川・神戸川の治水計画を発表。そのうち斐伊川水系下流の大橋川では、堤防を造り、松江大橋付近の川幅を百四十㍍に拡幅するなどの改修計画が持ち上がった。

川を広げるとなると、橋を架け替えなければならない。計画では、北に四㍍、南に五㍍それぞれ延ばすことなどが必要だった。「まず市民の声を聞こう」と八〇年十月、当時の中村芳二郎市長を代表とする「松江大橋歴史研究会」が設置され、同会は翌年三月、「現状の姿のまま架け替える」とする結論を出した。

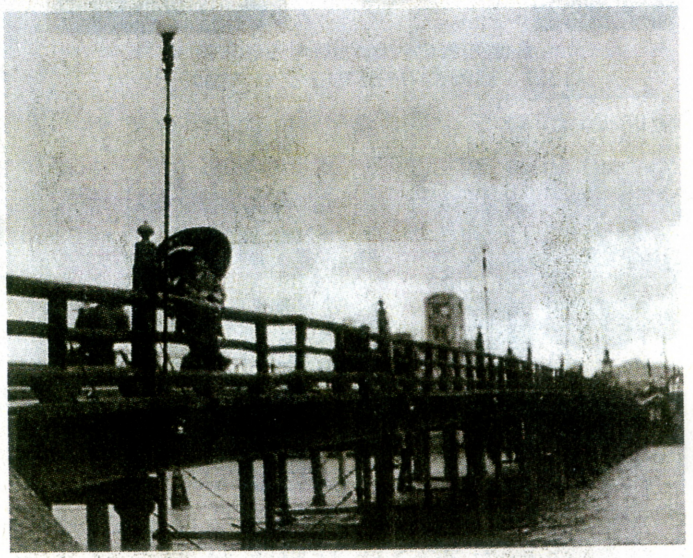
委員は郷土史家ら九人。市文化財保護審議会委員として加わった島田成矩・松江高専名誉教授（73）（日本文化史）は、振り返る。

「岡山産御影石の欄干に青銅の擬宝珠（ぎぼし）、中央に張り出す展望所、春日灯ろう……。こんなしゃれた橋は東京、大阪にもそうはない。架け替えるなら、材料を取り寄せ、松江の名物としてしっかり残そうということになったんですね」

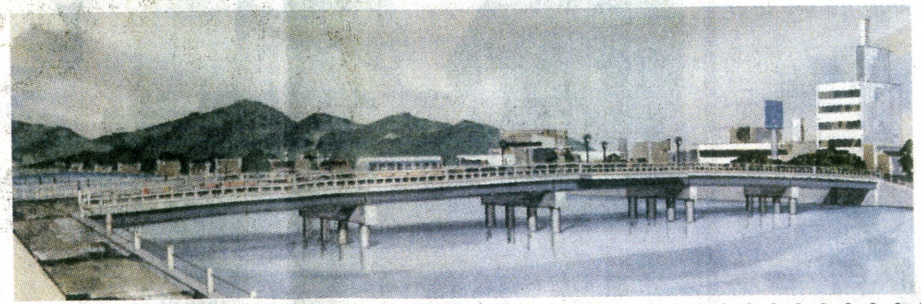
旧建設省はこれを基に、設計に入る予定だったが、直後の八二年、「中海の水位が上がる」と鳥取県側から〈待った〉がかかり、計画はストップ。そして二〇〇一年、上流のダム整備などを背景に、鳥取、島根両県知事が改めて調査測量の実施に合意、十九年ぶりに改修事業は動き出した。

「ただ丈夫に生まれ変わるだけでは意味がない。装飾を含めた全体に気を配らないとね」。島田さんは、今もそう願っている。

バスや車が行き交う現在の松江大橋は17代目



先代（16代目）の松江大橋＝1928年ごろ撮影。
若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供



1981年に発表された18代目の完成予想図